Tulips University of Tsukuba Repository

ライプニッツにおける可能的な個体の成立の問題

著者	菅原 領二
雑誌名	筑波哲学
号	23
ページ	75-90
発行年	2015-03-31
その他のタイトル	The problem of the constitution of possible individuals in Leibniz
URL	http://hdl.handle.net/2241/00128923

『筑波哲学』第 23 号（2015 年）

ライプニッツにおける可能的な個体の成立の問題

菅原　領二

序

本稿はライプニッツにおける可能的な個体の成立の問題を扱う。そのため、まずライプニッツにおける個体の定義を確認しよう。次のように定義される[1]。「個体的実体の本性とはしかじかの完足概念 notion compléte を持つことにある[2]。」完足概念とはさしあたり個体の概念（例えばアダムやカエサルの概念）と考えれば十分である。そしてこの個体概念とは時空間や純粋本質の領野等に幽霊のごとく浮遊しているものではない。個体概念は神の知性の内にある[3]。

この概念は「可能的な個体」とも言い換えられる。可能的とはある概念に内属する述語が矛盾していない状態を指す。本稿はこの可能的な個体の成立の仕方の究明を目標とする。よってこの試みは『アルノー宛書簡』見られるライプニッツの次の一文の注釈とも考えられる。

> 以下のことを疑う必要はない。神がアダムについてしかじかの概念を構成すること、もしくは可能的なものどもの領野、すなわち神の知性において（dans le pays des possibles, c’est-à-dire dans son entendement）、完全に形成された概念を持つということ[4]。

このようにライプニッツは神がその知性において可能的な個体の構成を行うと語りはする。しかしその具体的な仕方を明確に語ることはない。いくつかの先行研究はこの問題にアプローチしてきた。Guéroult が 1946 年と 1947 年の論文において先鞭を

---

[1] ここでは本研究に関係する種類の個体の定義を挙げる。より具体的には神学的文脈や自然学的文脈で定義される事もある。これに関して Fichant(2004), pp.25-43; Wilson(1989), p.80 を参照。
[2] 『アルノー宛書簡』、1686 年 6 月、第二系列第二巻四十九頁。以下、アカデミー版からの引用に際してはこの版を A と略記し、系列をローマ数字で、巻数をアラビア数字で表記する。
[3] Cf.『アルノー宛書簡』、1686 年 6 月、A, II, 2, p.49.
[4] A, II, 2, p.49. 「アダムの完足概念を形成するためには、他のものに依存するところの述語は切り離し、全ての原初的な述語をとりあつめるのみで十分である。」（A, Ⅱ, 2, p.50）という箇所も参照のこと。

付け[5]、次いで 1971 年に Fichant が[6]、そして 1994 年の Gaudemar がこれを論じてきた[7]。彼らの考察はなるほど可能的な個体の成立を語る上でいくつかの重要な点を示してはいる。しかし、これらの研究は可能的な個体の成立を体系立てて論じているわけではなく、かつアカデミー版以前の旧資料（ゲルハルト版、クーチュラ版）に依拠したものであった。本発表は彼らの試みを受け継ぎこの問題を体系立てて論じることを具体的な筋道としたい。そのため、本稿はまず可能的な個体の定義、次いでその材料、最後に構成の具体的方法について論じていく。

1 可能的な個体について

まず初めに神における可能的な個体の在りようを確認したい。ライプニッツにおいて個体はそれが創造される以前には神の知性において存在する[8]。この可能的な個体は複数の述語＋基体から成り立っている。述語から成り立つとはカエサルの個体が「ルビコン川を渡る」、もしくは「ポンペイウスに勝利する」といった複数の述語から成り立っているという意味である。

ただしこのように述語が集合するためには基体が必要である。「ルビコン川を渡る」と「ポンペイウスに勝利する」が結合するにはそれが結合する場所として基体が要請される。

> 基体と諸形相もしくは諸属性が異なるということは驚くべきことである。さらに、次のことは必然的である、すなわち諸形相についてはそれらの単純性のために何も言われることができないため、ゆえにいかなる命題も諸形相が基体に結合されることによってのみ真となることになるということ。思惟は持続ではないが、思惟する者は持続する。そしてこれが実体と諸形相の違いである（Cogitatio non est

---

[5] Cf. Guéroult(1946); (1947). Guéroult はこの二つの論文において、個体の概念が無限性を持っており、決して単純ではないことを主張した。

[6] Cf. Fichant(1998), pp.85-119. この論文は Fichant が 1971 年に発表したものの再録である。Fichant はこの論文において、可能的な個体が制限を受ける理由を単純形相の複合に求めた。

[7] Cf. Gaudemar(1994). Gaudemar はアリストテレス等の質料形相論とは異なり、ライプニッツの個体の成立においては質料のような基体の役割を果たす存在者が必要とされていないことを指摘した。

[8] 例えば「（略）可能的なものどもは永遠から神の知性の諸観念において存在する」（『神の大義』、ゲルハルト版ライプニッツ哲学著作集、六巻、p.440、以下ゲルハルト版を G と略記し、巻数をローマ数字で、ページ数をアラビア数字で示す。）

duratio, sed cogitans est durans. Et haec est differentia substantiae a formis）。（強調は筆者による）[9]

思惟という述語はそれそのままの状態では持続という性質を持てない、言い換えれば結合されえない。この結合を担保するものが基体なのである。

以上で個体が述語＋基体から成り立っていることが確認された。そして Guéroult [10] が指摘するようにこの個体は無限性を持っている[11]。この無限性とは量的に多い等の意味ではない。個体が無限に多くの述語を持つと言われる意味で、無限なのである。

この無限性テーゼは可能的な個体の在りようの根本に関わる。ライプニッツが完足概念 notion compléte と書くとき、不完足概念との対比が強調されている。不完足概念とは例えば三角形等の普遍概念である。なるほど普遍概念はある程度の規定を持っている。例えば「三角形」は内角の和が 180 度である等の情報を含んでいる。しかし、これは時空間上の情報は何一つ含んではいない。「三角形」が 2014 年にどこそこにあるとか、何色であるもしくはしかじかの材料から作られるといった事柄とは関係を持っていない。このようにある程度規定された情報を持ちつつも、変数のような規定されていない部分を持つ概念が不完足概念と言われる[12]。この不完足概念に比して、完足概念はこれ以上規定されえないほどに限定を受けた概念である。カエサルの概念は、「いつ生まれる」、「あそこにいる」等の全時空間規定を含んでいるために完足的である。さらに言えばカエサルがカエサルたるのも、この完全な規定のゆえであり、少しでも述語が違えば「カエサルもどき」となる[13]。

さて、以上で可能的な個体の性質を列挙した。個体は基体＋述語でもって構成さる。そしてこの述語はもはや述語付けられる個体が他の述語を受け入れる余地を持たないほどまでに多い。これをしてライプニッツは完全に規定されているとし、これこそが個体であるための条件であると考える。

---

[9] 『神の諸形相、もしくは諸属性について』、A, VI, p.514.

[10] Cf. Guéroult(1946); (1947).

[11] Cf. 「実体はその述語の無限性を説明するものである」（『デ・フォルダー宛て書簡』、G, II, pp.256-257）

[12] 実際にはライプニッツはこれを種的な「球 sphère」概念との違いで説明する。これに関して『アルノー宛書簡』、1686 年 6 月、A, II, 2 , pp.45-46 を参照。

[13] Cf. 「さらに、もしアダムが別の出来事を持つのであれば、それは我々のアダムではなく別のものであるということが帰結します。なぜならば、これは別のものであると我々が述べることを何も妨げはしないからです。」（『アルノー宛書簡』、1686 年 6 月、A, II, 2, p.49）

2 可能的な個体の材料

第一章では可能的な個体の性質を確認した。本稿の目的はこのような可能的な個体がどのように神の知性において生じるのかを探究することであった。第二章ではこの個体の材料について論じる。

ライプニッツにおいて、このような個体の材料は神の完全性であり、単純形相である。理論的に考えてこれ以外は不可能と言える。理由は次の通りである。まずいかなる現実に存在するものも、可能的であるという段階を経由して存在している[14]。さて、事物が可能的であるとは神が存在することによって基礎付けられている[15]。よって、現実的ないし可能的な全てのものは神に由来していなければならない。この依存関係がある以上、神の前にはいかなるものも存在していないのだから、神以外のものが材料となることはできない。

それでは神の完全性、もしくは単純形相とは何か。それは(1)絶対的 absolutum で肯定的 positivum そして(2)単純 simplex なものである[16]。(2)とは複合されていないくらいの意味である[17]。(1)に関しては以下に詳論したい。

絶対的で肯定的とはそれが否定とは関わりを持たないという意味である。例えば、マイモニデスやロックは神の属性を否定的なものと理解していた[18]。これは何らかの不完全な性質の否定に過ぎないというものであり、その場合に神の完全性自らがポジティブな意味を持つことはない。たとえば我々が神に対して、「善」という性質を帰属させたとする。これは否定的な仕方で理解するのであれば、「悪ではない」ということしか意味しない。神の完全性はこのようにネガティブな意味で規定されない。加えて、「絶対的で肯定的」とはそれがある最大値を持ちうるということを含意している[19]。例えば「数」は最大値を持ちうる概念ではない。「最大の数」を考えてみればこれは明らかである。「最大の数」を考えたとしても、それに思考上でプラス 1 するだけでそれを超える数が帰結してしまう。ここからライプニッツは最大の数は矛盾している一方

---

[14] Cf.『神の大義』、第十五節、G, VI, p.440.
[15] Cf.『神の大義』、第八節、G, VI, p.440.
[16] Cf. 「私は肯定的で絶対的、すなわち何であれそれが表現するところのものをいかなる制限もなしに表現するところの単純な性質を完全性と呼ぶ。」(『最も完全な有が現実存在すること』、A, VI, 3, p.578)
[17] Cf.「さてこの種の性質は単純であるがゆえに分解不可能、言い換えれば定義不可能である。」(『最も完全な有が現実存在すること』、A, VI, 3, p.578)
[18] この哲学史的背景に関しては Adams(1994), pp.115-116 を参照。
[19] Cf. 『形而上学叙説』第一節、A, VI, 3, p.1531.

で、最大の知や全能はそうではないと主張する。以上から肯定的で絶対的であるとは、それが否定とは関係を持たず、最大値を許容する事を意味していると理解することができる。

あまねく全ての事物はこの神の完全性から成り立っている[20]。全てのものはこの神の本質もしくは完全性を材料として成り立っているのであり、例外はない。これを「本質一元論（monism of essence）」と呼べるだろう[21]。

そして、ライプニッツの完全性概念が〈現実存在 existentia〉という性質を含まないということにも注意されたい。伝統哲学における神の存在証明において神の完全性が〈現実存在〉を含んでおり、それゆえに神の〈現実存在〉が帰結するというタイプのいわゆる存在論的証明というものがある。この証明の前提となっているのは、〈現実存在〉が完全性の内に含まれるということである[22]。

これとは反対にライプニッツは〈現実存在〉を完全性から排除する[23]。それは〈現実存在〉が事物の本性とは言い切れないからである。ライプニッツにとって「熱さ」や「冷たさ」は事物そのものに属しているのではなく、我々の知覚と事物との関係でもって生じる概念であった。これと同様に〈現実存在〉も事物に帰属するものではないことが可能である。ここからライプニッツは〈現実存在〉が完全性ではないと断定する[24]。

可能的な個体の材料として完全性を考えるにあたり、この〈現実存在〉が完全性から排除されるという事態は注目されるべきである。完全性の内に〈現実存在〉が含まれるのであれば、それを材料として作られた個体は神の知性もしくは可能的なものの

---

[20] Cf. 「事物の十分な理由は全ての原初的な要請の集積であるゆえに（これらは他の要請を必要としない）全てのものの原因は神の属性そのものに分解される事は明らかである。」（『称賛されるべき自然の普遍的な諸秘密についての諸発見の注記』、A, VI, 4, p.1618）

[21] 「本質一元論」という言葉に関して Di Bella(2005), pp.74-75 を参照。

[22] 〈現実存在〉が完全性に含まれないがゆえに、ライプニッツは神の完全性からその現実存在を引き出すという仕方で神の存在論的証明を行わない。ここで触れる余裕はないが、ライプニッツの神の存在論的証明に関して Adams(1994), pp.135-156 を参照。

[23] Cf. 「〈現実存在 existentia〉が完全性、すなわち実在性の度合いなのかどうかは大いに疑われうる。というのも、〈現実存在〉が概念されうるものの内に、すなわち本質の部分の内に含まれるのかどうかという事が疑われうるからである。（略）しかし〈現実存在〉そのものは完全性であるという事は真ではない。というのも、〈現実存在〉とはただ、諸完全性の互いのある種の比較に過ぎないからである。」（『現実存在、それは完全性か』、A, VI, 3, p.1354）ただし、このテキストに見られる通り、完全性から〈現実存在〉を排除するライプニッツの根拠はあまり説得力があるもののようには思えない。

[24] 完全性というトピック以外でも、ライプニッツは〈現実存在〉という性質そのものをあまり重要視しておらず、「事物 res」や「存在者 ens」を定義する際にも〈現実存在〉として定義しないという。これに関して Grua(1953), p.47 を参照。

領野に留まる事ができず、即座に存在してしまうからである。

繰り返し言えば、〈現実存在〉を材料として作られるという事はそれが〈現実存在〉の成分を持つという事である。あるものが〈現実存在〉の成分を持てば、それはどのような形であれたちまち存在してしまうことになるだろう。可能的な個体が神の知性において存在するためには〈現実存在〉は神の完全性の内から排除される必要があったのである[25]。

最後に神自体についても言及しておく。神はこのような完全性をもつ主体であり、神自身はこれら完全性の集合を持つ基体として定義される[26]。

以上で、可能的な個体の材料としての完全性の性質が明らかにされた。再度確認しよう。まず神の完全性は絶対的かつ肯定的、そして単純である。これは否定を含まず最大限の度合いを持ち、複合されていないという意味である。さらに、全ての事物の本質はこの神の完全性から成り立っている（本質一元論）。そして神の完全性は〈現実存在〉を含まない。最後に神自身はこのような完全性の基体として定義される。

Gaudemar はこの完全性を「カード遊び」（ポーカーでもなんでもよい）におけるカードで表現する比喩を用いた[27]。これに従えば、神そのものは「最も強いカード」の集まりと見なされることになる。

3 可能的な個体はどのように構成されるか

以上で可能的な個体の材料となる神の完全性の性質が描かれた。ついで可能的な個体の構成について論じたい。

---

[25] 興味深いことに中世哲学、例えばトマス・アクィナスにおいては完全性 perfectio はそもそも「存在 esse」に由来するものとされている。「全てのものどもの完全性は存在することの完全性に帰着する。あるものどもが完全であるのは、それらがある仕方で存在を持つ限りにおいてである。」（『神学大全』第一部第四問題第二項主文）このことに鑑みるに、ライプニッツは完全性の理解において伝統哲学とは異なっていると考えられる。

[26] Cf. 「神の本質は以下のことにある。すなわち全ての共可能的な諸属性の基体であること。」（『神の諸形相もしくは諸属性について』、A, VI, 3, p.514）

[27] Cf. Gaudemar(1994), p.36、Gaudemar 自身が「カード遊び」という言葉によって説明しようとしたことは、伝統哲学とは異なりライプニッツの創造論において「限定されるもの limité」は想定されていないという特徴である。アリストテレス的質料形相論の文脈において、事物は形相という限定するものと、質料という限定されるものにより構成されるのであるが、ライプニッツにおいてはこのような質料という被限定の原理は存在せず、形相によってのみ事物は構成されるという。

3.1 構成を行う主体について

可能的な個体が具体的に構成される方法について考察する前に、構成を行う主体について確認しておく。構成を行う主体は神そのものに他ならない。それでは神のどのような働きによって構成が行なわれるのか。それは神の知性認識である。ライプニッツにおいて神の作用はおおまかに言って知性と意志である。意志は現実存在するものにかかわる。ここで問題となっているのは存在する以前の可能的な個体のため、この構成という働きは知性認識作用以外に求めることはできない。そのため神の知性認識作用が可能的な個体を自らの完全性を材料として作り出すと考えることができる。当然のことながらこの事実の前提には神を知性認識者として措定するライプニッツの神理解がある[28]。

何かを考えるという行為は対象を必要とする。「思考する」という事実はその行為主体と思考されるものを前提としている[29]。それではライプニッツの神は何を考えるのか。それは自己自身に他ならない[30]。

神が自己認識することはこの文脈で言えば当然である。なぜならば、創造される以前の状態において存在するものは神のみであるからである。ゆえに神はまず自ら自身のみを思惟する。それでは神の自ら自身とは何か。これは完全性の集積として捉えられた限りでの神である。第二章において論じられた通り、神は完全性を備えた基体であった。したがって神の知性認識とはそれが自分自身であるような複数の完全性を認識することである。以上で、構成を行う主体と、その知性認識という作用について確認された。

---

[28] Cf. 「神はペルソナ、もしくは知性認識する実体であることが示されるべきである。」（『崇高なものどもの諸秘密、もしくは諸物の総体について』、A, VI, 3, p.475）ライプニッツにおいて全能等の他の属性よりも全知という属性が特権化されており、これは近世哲学において異質であるという。このトピックに関する哲学史的研究として Carraud(2002a)を参照。

[29] Cf. 「思惟は基体と対象を持つ。」（『神の諸形相もしくは諸属性について』、A, VI, 3, p.513）ここからライプニッツはデカルトを批判する。デカルトは「私が考える」から、それを行う主体である私の存在を証明した。ライプニッツによれば「私は考える」から、私の存在のみならず、考えられている事物の存在もまた証明される。「ゆえに二つの絶対的に普遍的な真理、すなわち諸事物の現実存在について語るところの真理があります。一方は我々が思惟するという事、もう一方は我々の思惟においてかなりの多様性があるという事です。前者からは我々が存在する事が帰結し、後者からは我々とは異なるものが存在する事が帰結します。（略）デカルト氏は省察の順序において前者にのみ関わり、彼自らが目論んだ完全性に達し損ねたのでした。」（『フーシェ宛書簡』、A, II, 1, pp.246-247）

[30] Cf. 「神は知性認識する、なぜならば神は自ら自身に対して作用するからである。」（『精神について、宇宙について、神について』、A, VI, 3, p.465）、「必然的存在は自ら自身に対して作用する、すなわち思惟する。」（『現実存在について』、A, VI, 3, p.587）この引用文中で言われる作用することと知性認識することの関係に関しては Carraud(2002b), pp.468 を参照。

3.2 いかにして可能的な個体が成立するのか、そして「知性認識」とは何か

次いでどのように可能的な個体が生じるのかを論じる。この答えは 3.1 で確認した神の知性認識の内実を検討することから明らかになる。

なるほど神は自ら自身を知性認識する。それではより具体的に知性認識とは何を指しているのか。一般的には知性認識とは何かの本質を直観することとも言える。例えば、ソクラテスに対して彼が「人間である」と知ることのように。神が自らを知性認識することとは自分が神であることを知るということであると予想されるかもしれない。ただ、ライプニッツにおいては神の自己認識はこのような観照的なものであるにとどまらず、より生産的でポジティブな意味を有している。

具体的に見ていきたい。神の思惟作用は次のように規定される。「神は無限の仕方で、無限のものを案出する[31]。」上述で神が自己しか認識しないということは既に述べられた。ゆえにこの文は神が無限の仕方で自ら自身を思惟すると述べていると理解できる。この文面のみでは意味が不明瞭であるが、しかしこの事態そのものは次のテキストを具体例として読解することで内実が明らかになる。

> 私には諸物が神から生じるのはあたかも本質から特質が生じる仕方であるように思われる。例えば 6 は 1＋1＋1＋1＋1＋1 である。ゆえに 6＝3＋3、＝3×2、＝4＋2 云々。一つの表現が他の表現から異なることは疑われてはならない（略）[32]。

このテキストから[33]、無限の仕方による自己認識が理解される。注釈しよう。まず、

---

[31] A, VI, 3, p.515. もしくは「神は無限の仕方で自らを明らかにする。」（『神の諸属性もしくは諸形相について』、A, VI, p.514）

[32] 『諸形相に基づく諸事物の起源について』、A, VI, 3, pp.518-519. ただし多くの先行研究において、このテキストはスピノザ主義的と扱われ、可能的な個体の成立の問題と関係を持たないものとみなされる。例えば Laerke(2008), pp.439-551 の研究を参照。本稿はこのタイプの先行研究に反論しその論拠を挙げる作業を行わないが、本稿はこの見方が正しいものとは考えない。さしあたり、Di Bella (2005), pp.72-76 を参照。

[33] このテキストを神の知性認識の説明と理解することは少々強引に見えるかもしれない。以下で補足したい。同じ文脈においてこの組み合わせの理論が次のように説明される。

(1)「（略）さて、諸可能的な単純形相の組み合わせから諸様態が帰結する。これらは諸イデア ideae であり、これはあたかも本質から特質が生じるようにである。」（A, VI, 3, p.521、強調は筆者による。）

(2) 「この基体自身すなわち神は自らの偏在性により広大無辺 immensum を与え、この広大無辺が他の諸基体と結合される事で全ての可能的な様態、すなわち神自身における事物を生じさせる。」（A, VI, 3, p.523、強調は筆者による。）

ここで神は「6」と捉えられている。この「1＋1＋1＋1＋1＋1」は神の完全性を指している。この完全性は多くの仕方で結合されることができる。すなわち 3＋3 や 3×2 のようにである。その合計が 6 になる限り、神の本質は無限の仕方で捉えられる。6 を 1＋5 と捉えることも、1×6 と捉えることもできるように。このように自己の持つ完全性を無限に多くの仕方で組み合わせること、これが神の自己認識である。すなわち、この神の完全性の様々な結合のヴァリエーションそのものが可能的な個体であり、その成立の仕方と言える。

さらにこの「組み合わせ」という事態を明確化しよう。次のように思われるかもしれない。なぜ神が知性の内に個体を生じさせるために、複数の完全性が必要なのかと。新プラトン主義的に、一つの完全性が分裂し、個体を作るという事も考えられるのではないか。ライプニッツは特に熟慮することなく完全性が複数必要であると考えたわけではない。「全ての属性が何であれ任意の属性と関係づけられる事によってのみ、神において諸様態が帰結する[34]。」ある一つのものから複数のものが現れることは、それが他の多くのものに関係付けられることに依存している。例えば「円周」という概念がある場合にそこから生じるのはそのいずれの部分も類似しているという性質である。他の多くのものに関係付けられて初めて多くの性質が現れる[35]。このようにして、ライプニッツにとっては個体の成立のために複数の属性が必要とされるのである。

3.3 完全性同士の関係について

先に進む前にこの完全性同士の「関係」そのものについて確認しておきたい[36]。完全性は無限の仕方で組み合わせられるのであった。この組み合わせられるという事態はこの完全性同士が互いに排除し合わないということを前提としている。ライプニッツ

以上の二つの引用文において注目されるべきなのは傍点を振った二つの単語である。すなわち(1)「諸イデア」、(2)「可能的」という表現である。組み合わせにより帰結する事物が(1)では「イデア」と言われ、(2)では「可能的」という形容詞が付加されている。イデアとは神の知性において生じるものであり、かつ神の知性は可能的なものの領野と言われる。ゆえにこの組み合わせ理論の文脈は神の知性において生じることであると理解することができる。さらに本文中に引用された「生じる」という表現を「自動的に発生する」という意味では理解しにくい。以上のことから、これは神の知性認識の作用により「生じる」という意味であるという仮説を立てることができる。

34 『神の諸形相もしくは諸属性について』、A, VI, 3, p.514.

35 これはチルンハウスがスピノザに対して行った質問に現れる例である。Kulstad(1999a)が明らかにしているように、ライプニッツの一つの完全性から多様な事物が生じないという発想はスピノザ／チルンハウス哲学に由来している。

36 この節の記述について Fichant(1998), pp.84-119 の研究が基盤となっている。

は事物と事物の関係を示すために共可能性（羅）compossibilitas（仏）compossibilité／不共可能性（羅）incompossibilitas（仏）incompossibilité という対概念を用いることがある[37]。この概念に従えば、論理的に可能であるような複数の事物の間で互いに排除し合うものがあることになる。例えば罪を犯さないアダムと罪を犯すアダム等である。両者は論理的に矛盾していないという意味で可能的ではあるが、両者は同一の世界に存在する事はできない。なぜならばこれらはアダムの性質の次元で矛盾しているからである。この関係が不共可能的であり、矛盾していない個体同士の関係は共可能的という。この「関係」に関するライプニッツの概念を考慮に入れるのであれば、完全性が無限に組み合わせられるという事態に対して疑問が生じるかもしれない。すなわち、複数の完全性同士の間に「不共可能」という関係が成り立つのではないか、というようにである。

Fichant はこの種の疑問に適切に答えている[38]。なるほど確かに事物の間に共可能性と不共可能性はある。しかしこれは完全性同士の関係とはレベルが異なるのである。共可能性／不共可能性が導入されるのは、すでに構成された個体同士の関係であり、その個体そのものが構成される完全性の段階においてそれは存在しない。完全性同士の関係に対するライプニッツの規定は共立的 compatibilis というものである[39]。「共立的」とは互いに排除しない関係であり、この理由は神の完全性が純粋に肯定的かつ制限を受けていないからである。これは次の表で表現できる。

	関係の種類	関係の原因
完全性間	共立性のみ	完全性の非制限性、肯定性
個体間	共可能性/不共可能性	個体の不完全性[40]

以上のように完全性同士の「関係」そのものについて確認された。この関係は互い

[37] 例えば『人間知性新論』第三巻第六章第十二節。
[38] Fichant(1998), pp.107-112.
[39] Cf. 「私はまさに絶対的に純粋であり、非制限的な肯定的な他の全属性が共立的 compatibilia であることを示す」(『形而上学と学知に関する注記』、A, VI, 3, p.396）さらに詳しい神の完全性同士の共立性の証明については『最高完全者が現実存在すること』（A, VI, 3, pp.578-579）を参照。このテキストにおいてライプニッツは神の存在論的証明を完全性同士の共立性から行っている。
[40] 個体の不完全性はそれが完全性の複合により成立しているということに基づいている。「否定的な諸様態はただ肯定的なものどもの複数性に由来している。」(『最も完全な有が可能的であること』、A, VI, 3, p.573）

に排除し合うタイプのものではなく、両立することのできるものである。このような共立性があるため、神は自由に自らの完全性を無限のパターンで組み合わせることが可能となるのである。

ここで我々は既に述べられたように、個体が述語＋基体であるとされた際の「基体」の必要性を理解することができる。完全性同士は共立するものであった。これは共に存在できることを意味するに過ぎない。神の知性認識により組み合わせられ、まとめられるとしてもそれらの接着材の役割を果たす「基体」が必要である[41]。繰り返しであるが、なるほど確かに完全性同士は互いに排除し合わない。しかし、これらが組み合わせられることそれ自体のためには基体もまた必要なのである。もし基体がなければ、これらの完全性はそもそも関係を持たず、神に結合されることもできなかっただろう。

3.4 可能的な個体はいかにして相互に区別されるのか

可能的な個体が生じる仕方については既に論じられた。ついで、この個体がどのように区別されるのか論じたい。個体はそれが複数存在する限り、それらがどのように区別されるのか論じることは必要不可欠であるからだ。

繰り返しであるが、神の完全性は 1＋1＋1＋1＋1＋1 であり、＝6 は神そのものに他ならず、可能的な個体とは 3＋3 や 2×3 とそれぞれの基体である。

次の疑問が生じるかもしれない。これらの個体は区別されないのではないのか、という疑いである。3＋3 や 2×3 であれ、その答えが 6 になる以上、これらは同一の個体に収束するのではないか。

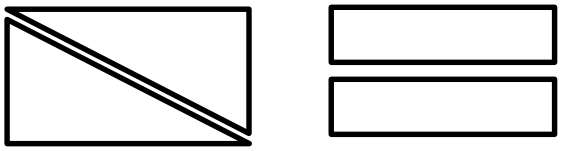
最も簡単な答えはそもそも基体のレベルで異なっているという応答である。しかしこれは本質的な答えにはならない。なぜならば、我々はある個体とある個体を区別する際にそれらの本質的な相違点に基づいて行うからである。「基体」はそれそのものが何らの性質を持たず、ただ完全性同士の接着剤に過ぎない。そのため「基体」同士の区別をもって答えとすることは正しく問題に応答したとはいえない。加えてライプニッツ自身が個体間区別を「基体」に基づいて行っているわけでもない。

できる限り正しく答えるためにはライプニッツが個体間の区別をどのように規定

---

[41] Cf.「事物はただ神における形相の組み合わせのみならず、基体 subjectum とともに生じる。」（A, VI, 3, p.523）ただし、このテキストに現れる基体 subjectum を被造物についてではなく、神について言われていると理解する解釈者も存在する。例えば Laerke(2008), pp.532-534. 本稿では根拠を挙げて批判をする余裕はないが、このタイプの解釈者達の読み方はかなり強引であるように思われる。

しているのかが理解されなければならない。ここで『個体の起源についての省察 *Meditatio de principio individui*』と題されたテキスト[42]を参照したい。このテキストにおいてライプニッツは異なる複数の作り方から同一の結果が産出された場合にいかなる仕方でこれらは区別されるかを論じている。次の二つの図形が想定されている。



左の図形は三角形が二つであり、右の図形は長方形が二つである。これらのペアがそれぞれ結合される事で次の図形が産出される。

ライプニッツの問題設定は違う産出の仕方に基づいて（三角形二つ、長方形二つ）生じた二つの四角形はいかにして区別されるのかというものである。なるほど結果（四角形）だけ見るのであれば、区別されることはできない。ライプニッツは次のように述べる。「（略）産出された四角形においては産出の仕方が常に区別されることは必然的である[43]。（強調は筆者）」ここからライプニッツは事物の区別という問題に＜産出の仕方＞という観点を持ちこんでいることが明らかである。たとえ見た目が同一のものがあったとしても、それが違う仕方で産出される限り区別される。個体間の相互の区別は「作り方の違い」に求められるのである。

したがって個体は 2×3 や 3＋3 が神の完全性（1＋1＋1＋1＋1＋1）という同一の材料から成り立っており、＝6 となるとしても、＜産出の仕方＞すなわち組み合わせ方そのものの違いによってこれらは互いに区別されるのである。

4 結論、そして可能的な個体の成立に関するライプニッツの独自性について

以上で我々はライプニッツにおける可能的な個体の成立について、一通りの理解を得ることができた。冒頭のテキストをもう一度引用し、これまでの内容を再確認する。そして最後にライプニッツのこのトピックに関する独自性を見出し、本稿を締めくく

[42] A, VI, 3, pp.490-491.
[43] A, VI, 3, p.490.

りたい。

本稿の目的は次の文章の意味を体系的に解明することであった。

> 以下のことを疑う必要はない。神がアダムについてしかじかの概念を構成すること、もしくは可能的なものどもの領野、すなわち神の知性において完全に形成された概念を持つということ[44]。

まず、ライプニッツがここで用いている個体（アダム）の在り方について確認した。これは完足概念であり、無限の述語を内包する可能的な個体であった。ついでこれの材料となる神の完全性について論じた。神の完全性は絶対的で肯定的なものであり、否定を含まない。それゆえに完全性同士が同一の基体において存在する事ができる。

そして神の知性について規定した。神の認識は自己認識である。この自己とは完全性の総体を指す。この認識とは自らの完全性を組み合わせることである。この完全性のいわば組み合わせにより、各々の組み合わせに対応する基体とともに可能的な個体が生じる。そしてこのような個体はひとつひとつは材料のレベルでは同一であるが、組み合わせの仕方という次元で互いに異なる。以上が冒頭の文章に対する注釈であり、可能的な個体の成立の具体的な仕方である。

最後にこのトピックに関してライプニッツの「独自性」とは何かを考えてみたい。比較対象の選定にあたって、デカルトやスピノザといういわゆる同時代人を選ぶことはあまり意味があることとは言えない。彼らは現実存在に先立つ可能的なものについて言及してはいないし、神の知を重視してもいないからである。ゆえに同じ土俵に立っているとは言えない。そこで中世のトマス・アクィナスとの比較からライプニッツの「独自性」の一つを推し量ってみたい[45]。

結論を先に言えば、ライプニッツの独自性は可能的な個体の成立を「組み合わせ」理論でもって説明したことにある。これはトマスが神の知性における個体の成立をどのように説明しているかを確認することで示される（以下トマスが用いている論証は

---

[44] Le Roy, p.108.

[45] ここでライプニッツに対する比較対象はトマスではなく、スコトゥスではないかと思われるかもしれない。なるほど確かにライプニッツの様相概念の起源はスコトゥスにある、という哲学史家（例えばクヌーティラ）の見解は流布してはいる。しかし近年 Schmutz(2006)がこの種の見解をスコトゥスのテキストに基づいて反駁した。ここから、ライプニッツの比較対象としてトマスを選択する余地はあるように思われる。トマスの「可能的なもの」に関する研究としては Storalski(2001)を参照。

全て省略する)。

まず、トマスは神の知の存在を認める[46]。さらに神が自己認識することも認める[47]。加えて神は個物を認識する[48]。それでは神はどのように個物を知るのか。神が自らの本質の分有のされ方全てを見ることによってである[49]。各々の存在するものは神の完全性から成立しており、神が自分の完全性の「分有」のされ方の全パターンを認識することで個物を認識する。

トマスの説明の大枠はライプニッツと類似している。ポイントはライプニッツが「組み合わせ」として理論的に説明を与えた箇所をトマスは「分有のされ方」と定式化していることである。

以上を通して、ライプニッツの独自性を次の如くに推し量ることができるだろう。なるほど、ライプニッツのこのトピックに関する思想基盤そのものはオリジナルと言うことはできない。しかし、彼の独自性は「分有」という概念を「組み合わせ」として再解釈したことにあるのではないだろうか。すなわち 1＋1＋1＋1＋1＋1 とされる神の完全性から 2×3 や 3＋3 という可能的な個体が現れるのであり、この発想をライプニッツは伝統哲学の概念を洗練させることで編み出したとみなすことができるのではないだろうか。

引用文献表

＜一次文献＞

Leibniz

Samtliche Schriften und Breif, Akademie verlag, Berlin, 1923-.（アカデミー版）

Die philosophischen Schriften von Gottfried Wilhelm Leibniz,herausgegeben von C. J. Gerhardt, 7 Bande, 1875-90.（ゲルハルト版）

Thomas Aquinas

---

46 『神学大全』、第一部第十四問題第一項主文（以下『神学大全』を ST と略記し、第一部を Ia と、問題を q、項を a、主文を co と略記する)。

47 Cf. *ST*, Ia, q.14, a.2, co. なお伝統哲学において神の知の問題と「可能的 possibile」の関係については Muralt(1995), pp.29-33 を参照。彼によれば「可能的」とは論理的無矛盾というよりも、神の能力が関わるもの全てに言われることであり、トマス以後「超-超越概念 sur-transcendant」と形容されるという。

48 Cf. *ST*, Ia, q.14, a.11, co. ただしトマスの個体に関する見方はライプニッツとはまったく違い、指定された質料（位置情報）に訴えるものである。例えば「人間」という普遍はこの場所、あの場所という空間規定を受けることで、このソクラテスやプラトンになる。

49 Cf. *ST*, Ia, q.14, a.13, co.

Sancti Thomae Aquinatis doctoris angelici Opera Omnia iussu Leonis XIII. P. M. edita. Cura et studio fratrum praedicatiorum, Roma: Commissio Leonina, 1882-.（レオ版）

＜二次文献＞

Adams, Robert Merrihew

—(1994), *Leibniz: Determinist, Theist, Idealist*, Yale University Press, New Haven.

Carraud, Vincent

—(2002a), “Connaître comme Dieu connaît : Omniscience et principe de raison”, *Le contemplateur et les idées*, ed. O. Boulnois, Vrin, Paris, pp.249-70.

—(2002b), *Causa sive ratio. La raison de la cause Suarez á Leibniz*, PUF, Paris.

Di Bella, Stefano

—(2005), *The Science of the Individual: Leibniz's Ontology of Individual Substance*, Springer, Dordrecht.

Fichant, Michel

—(1998), *Science et métaphysique dans Descartes et Leibniz*, PUF, Paris.

—(2004), “L'invention philosophique”, in G. W. Leibniz, *Discours de metaphysyque, Monadologie*, éd. M. Fichant, Galimard, Paris, pp.7-140.

Gaudemar, Martine de

—(1994), *Leibniz: de la puissance au sujet*, Vrin, Paris.

Grua, Gaston

—(1953), *Jurisprudence Universelle et Théodícée, selón Leibniz*, PUF, Paris.

Guéroult, Martial

—(1946), “Substance and the primitive simple notion in the philosophy of Leibniz”, *Philosophy and Phenomenological Research*, Vol. 7, pp.293-315.

—(1947), “La constitution de la substance chez Leibniz”, *Revue de métaphysique et de moral*, Vol.52, janvier, pp.55-78.

Kulstad, Mark

—(1999), “Leibniz’ De summa rerum. The origin of the Variety of things, in Connection with Spinoza-Tschrnhaus Correspondence”, *Studia Leibnitiana*, Supplementa, Vol.34, pp.69-86.

Laerke, Morgens

—(2008), *Leibniz lecteur de Spinoza*, Champion, Paris.

Muralt, De André

—(1995), *Néoplatonisme et Aristotélisme*, Vrin, Paris.

Schmutz, J

—(2006), “Qui a inventé les mondes possibles?”, *Les Mondes possibles*, ed. J. C. Bardout and V. Jullien, Presses universitaires de Caen, Caen, pp.9-45.

Stolarski, Grzegorz

—(2001), *La possibilité et l’être*, Editions Universitaires Fribourg Suisse, Fribourg.

Wilson, Catherin

—(1989), *Leibniz's Metaphysics*, Princeton University Press, Princeton.

（すがわら・りょうじ　慶應義塾大学大学院文学研究科在学）